

板付周辺遺跡調査報告書

(10)

—1984年度調査概要—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第115集

1985

福岡市教育委員会

正誤表、
市報告 第115集

頁	行	誤	正
例言	25	SE...井戸.SK...土壤	SE...井戸, SF...道路, SK...土壤
	27	磁針	磁北
挿図目次	Fig. 5	北から	東から
=	8	(1:200)	(1:100)
=	53	SK 48	SK 30
=	68	北方向	南から
1	15	既して	標して
3	表10	土壤(13-14)	土壤(13-14C)
	5	削減している	消滅している
4	Fig. 4	2cm	4cm
=	17	瓜形文	爪形文
6	Fig. 8		(上図) 南から (下図) 北から (1:100)
=	表左3	(1:200)	碧玉製
10	Fig. 14	碧玉製 (下段左から3) R599	R559
	表左行	584. 背面。鍵	584. 背面。鍵
14	Fig. 19	(遺物番号)	(左) (右上右) (右上左) (右下)
15	Fig. 21	SD01出土木製品 1	SD01出土木製品 1 (1: 2, 1:3)
17	33	その段段	その段階
19	表左上		SK 12
=	表左	R1003 1004	R1103 1104
24	Fig. 43	R35 R36	R36 R35 (入替え)
25	表	38 (疎か…)	38 (疎か…)
26	Fig. 47	R38	R80
=	表	R30	R80
28	Fig. 53	SK18出土遺物	SK30出土遺物
=	3	遺物を出土た。	出土した。
31	7	消滅している。	消滅している。
32	Fig. 67	20m	50m
33	6	工事1期	工事工期
34	3	第6次調査	第8次調査
=	12	遺構保存は	遺構保存は
36	Fig. 73	2 第5トレンチ(北から)	2 第5トレンチ(南から)
37		井戸祭紀に	井戸祭祀に
=	8	舟館り。	丹塗り
38	9	条理期の	条里期の

NO. 12498

卷首図版 SD 26全景(北から)



序

板付地区は、わが国で最初に稻作文化を受け入れました。国の史跡、板付遺跡がその事を顕著に表現しています。板付遺跡は、福岡市民が全国に誇り得る遺跡の一つです。

今年度の報告書の内容は、農耕文化の発祥の地、板付遺跡の範囲に含まれる資料と、板付遺跡に歴史的基盤を置きながら、発展した古代のお寺、高畠庵寺の領域を示す資料が含まれています。

今回の調査報告書は地元の土地所有者である、中平田保氏、勝山保氏、小西利三氏の御理解と御協力の結果であり、深く感謝申し上げます。

本書が、埋蔵文化財の御理解を得、かつ学校教育、社会教育に充分御活用頂く事ができれば幸いと存ります。

昭和60年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

例　言

- 1 本書は、福岡市教育委員会が国庫補助を受けて、昭和59年度に実施した福岡市博多区板付遺跡、ならびに周辺遺跡の調査概要である。なお、上記遺跡で行なった他の3区の調査についても概要を併せて掲げておく。
- 2 発掘調査は、教育委員会文化課が実施した。調査組織は、以下のとおりである。

総括　文化課長　生田征生
埋蔵文化財第2係長　折尾　学
調査担当　柳沢一男
杉山富雄
業務担当　松延好文
- 3 本書の執筆分担は以下のとおりである。

I・II・IV・VI……………杉山
III・V・VII……………柳沢
- 4 本書に掲載した実測図の作成は各担当者の他に藤尾換一郎氏、鈴木克彦氏、野村俊之氏、宮井善則氏の、写真撮影には上方高弘氏の協力を戴いた。記して感謝申し上げる。
- 5 掲載遺物実測図のうち、土器断面白ヌキは弥生土器、土師器を、スミベタは須恵器を、アミは陶磁器をそれぞれしめす。
- 6 調査に際して用いた遺構表示記号は次のとおりである。

S B…住居址、S D…溝、S E…井戸、S K…生坎、
S X…前記以外の遺構
- 7 本書に使用する方位は磁針である。真北との偏差は西偏6°40'である。
- 8 本書に使用する方位は磁針である。真北との偏差は西偏6°40'である。
- 9 本書の編集は、杉山・柳沢の協議により行なった。

本文目次

I	はじめに	1
II	B 11 a 区調査の概要	3
III	G 7 d 区調査の概要	20
IV	F 7 f 区調査の概要	22
V	E 7 a 区調査の概要	31
VI	F 5 d 区調査の概要	32
VII	高塙遺跡第11次調査の概要	34
VIII	おわりに	38

挿図目次

Fig. 1	板付及周辺遺跡調査区(1:7500)	2
2	B 11 a 区景(南から)	3
3	先七番時代の遺物(1:1)	4
4	縄文時代の遺物(1:2)	4
5	S X 30 (北から)	4
6	孫生時代の遺物(1:4、1:2)	5
7	S D 26 B 金景(東から)	5
8	S D 26 遺物出土状況立面図(1:200)	6
9	出土土状況	6
10	S D 26 出土遺物	6
11	S D 26 出土木製品 1	7
12	S D 26 出土木製品 2	8
13	S D 26 出土木製品 3	9
14	S D 26 出土木製品 4	10
15	S D 01 C 金景(東から)	11
16	S D 01 上層図(1:60)	11
17	S D 01 A 平面図(1:200)	12
18	S D 01 出土遺物(1:4)	13
19	S D 01 出土遺物(1:2)	14
20	墨書き	14
21	S D 01 出土木製品 1	15
22	遺物出土状況(東から)	16
23	出土出土状況(北から)	16
24	S D 01 出土木製品 2	16
25	S D 14・S D 15 (北から)	17
26	S D 14 出土遺物	17
27	S K 20 (南から)	17
28	S D 25 (南から)	17
29	S D 25 出土遺物(1:4)	18

Fig. 30	SD25（北から）	18
31	SK28（東から）	18
32	SK28出土遺物（1：4）	18
33	SK12・SK13（北から）	18
34	SK12・SK13出土遺物（1：4）	19
35	斬丸（1：5）	19
36	調査区全景（東から）	20
37	調査区全体図（1：200）	21
38	調査区全景（北から）	21
39	F7.1区全景（西から）	22
40	調査区周辺図（1：1000）	22
41	調査区全体図（1：100）	23
42	SK2（北から）	24
43	SK2出土遺物（1：4）	24
44	SK4（東から）	24
45	SK6（東から）	25
46	SK6出土遺物1（1：4）	25
47	SK6出土遺物2（1：4）	26
48	SK7（西から）	26
49	SK12（南から）	26
50	SK13・SK78（西から）	27
51	SK13出土遺物（1：4）	27
52	SK30（東から）	27
53	SK48出土遺物（1：4）	28
54	SK48出土遺物（1：4）	28
55	SK48（東から）	28
56	SB47（北から）	28
57	SB47出土遺物（1：4）	28
58	SX1出土遺物（1：4）	29
59	SB50（南から）	29
60	SB50出土遺物（1：4）	29
61	SK3（東から）	30
62	SE5（南から）	30
63	SE14（南から）	30
64	層位模式図	31
65	III区全景（北から）	31
66	古代水田とその整地層（東から）	31
67	F5.4区周辺図（1：1000）	32
68	I区 水田（中段）北方向	33
69	IV区12層 遺物出土状況（北から）	33
70	SK9（III区部分）北から	33
71	第7トレンチ全景（東から）	34
72	トレンチ位置図	35
73	トレンチ並びに追構	36
74	SE30出土土器実測図（1：5）	37
75	SE30実測図（1：40）	37
76	板付周辺遺跡概観（1：10000）	38

I はじめに

板付遺跡及び周辺遺跡においては、1973年度から、国庫補助事業として埋蔵文化財の発掘調査を行なっている。1984年度に行なった埋蔵文化財の発掘調査は、下水道工事に先立つものも含わせて計6件を数える。

本年度の調査は大きくみて、3つの地域において行なっている。

1984年度 板付周辺遺跡調査区

調査区	所 在 地	調査対象面積(測定面積)	調査期間	備 考
板付B11a	博多区板付6丁目	1838m ² (1560m ²)	84.5.5 ~ 7.14	高畠遺跡第10次調査
G7d	板付5丁目1-14	468m ² (370m ²)	84.7.24 ~ 8.6	
F7f	板付5丁目3-17	640m ² (225m ²)	84.8.9 ~ 9.17	
E7a	板付5丁目	長 80m (80m ²)	84.9.14 ~ 9.27	麦野下水道
E5d	板付2丁目	長 165m (126m ²)	84.10.27 ~ 85.1.31	"
高畠 11次	板付6丁目1-1	長 550m (550m ²)	84.12.10 ~ 85.1.25	九洲労働学校内下水道

板付遺跡環溝の載る中央台地の東辺、東南辺部では、下水道の建設に先立って行なったE7a区、F5d区の調査は、いわば道路に設けたトレンチの調査であったが台地縁辺部の状況を知ることができた。E7a区では沖積地が従来考えていた以上に消入し、それの弥生時代前期からの利用を知った。F5d区では、水川は台地から遠い北端部のみに遺存していた他に、E5・6区、E5a区、E5b区でみられたような整地層が、調査区南端部の台地裾部から以北の一級低い沖積層・ローム層の間に厚く堆積していた。F7f区では台地周縁部の斜面に立地する弥生時代の遺構の遺存する区域の調査を行ない、貯蔵穴、住居の分布を確認した。

板付南台地の西側沖積地では、G7d区の調査を行ない、南に接するG8a区検出の溝及び水田の広がりを検出確認した。

板付台地の南に位置する台地に立地する高畠遺跡では、警察学校地内の下水道工事に先立つて、高畠遺跡第11次調査で、台地東部の状況が明らかになってきた。既して台地縁辺部では遺構の遺存状態は良好で、弥生時代前期当初からの居住が確認できた。B11a区（高畠遺跡第10次調査区）は台地東北端に接する位置にあり、B12b区・B12c区で検出された溝が北から東へ流れの向きを変えること、これに平行して走り、台地縁辺に沿って北西方向に走る溝のあること、D10a区・D10b区で検出された古墳時代の溝が、本調査区まで延びて来ているらしいことがわかった。この溝からは、その2つの調査区と同様の状態で多数の木製品及び高环・小形丸底甌を中心とする多数の土器の出土があった。

以上、継続して行なって来た地点毎の調査で検出された遺構が、地点を越えたひろがりとして考えることを出来るようになる成果を得た調査ではある。

ただ本年度調査出土遺物は、未だ整理途上にあるものが大半で、とりあえず現時点で可能な分だけの資料を掲げておく。



Fig. 1 板付及周辺道路調査区(1 : 7500)

II B11a区調査の概要

調査の経過と概要

調査区は警察学校台地北東端に位置し、西半部は削平されてしまっているが、洪積台地に、東半部は沖積地となっている。沖積地部分は水田造構の調査後、約 500m²について矢板による高細遺跡調査区

調査区(板付周辺調査区)	調査年	出土資料	報告
1次(板付 D 9・10区)	1978	山河川氾濫層／弥生土器	板付周辺調査1(市原古文庫'74)
2次(A・B13区)	1979	溝なし／弥生土器、瓦、須恵器、土師器	1() 29集 '74)
3次(B12 a区)	1979	土器、杭列／須恵器、土師器、弥生土器	3() 36集 '76)
4次(D10 a区)	1979	土器、溝(8~9c)、溝(5c)／瓦、須恵器、土師器、木器	6() 57集 '80)
5次(—)	1980	遺構なし	
6次(—)	1981	遺構なし	
7次(D10 区)	1981	溝(5c, 8~9c)／埴造器、土師器、木器	8() 83集 '82)
8次(B12 b区)	1982	溝(8~9c)、土器、井戸、水槽中埋土須恵器、土師器瓦、木器、木器	9() 98集 '83)
9次(B12 c区)	1982	溝(8~9c)、杭列、土器／須恵器、土師器、瓦、木器	9() 98集 '83)
10次(B11 a区)	1984	溝(5c, 8~9c)、土瓦(13~14)／須恵器、土師器、木器	今回報 27
11次(—)	1984	自生土、骨生後頭、2c)、瓦窓穴(弥生後頭)、瓦片(骨生後頭、余良)	"

水切りを行なって下位の造構の調査を行なった。検出遺構は、台地上では、その縁辺に沿うような溝(S D14・15・23, S K20)の他に土塙(S K12・13・28)を確認した以外は、後世の削平により削減している。沖積地部分では水田(N層)の下位に、古墳時代の溝(S D26)、奈良時代の溝(S D01)、弥生時代の河かと思われるS X29とそれに設けられた造構S X30を検出した。遺物は収納用のコンテナにして50箱余りで、土師器と弥生土器が大半を占める。両者の比は3:2位である。以下、時代を追って概要を記す。



Fig. 2 B11a区全景(雨から)

先土器時代

S D01から細石核 R1276が出土した。佐賀県腰岳産と思われる黒曜石を使用し、細刃器剥離作業面を基準にして、下縁・後縁をもつ。ために打面は丸味を帯びた三角形状を呈し、かつ後方に傾斜する。細刃器剥離作業の加撃点は、打面調整により除去される。一側面に原礫面を残している。全体に、磨耗しておらず、西に接する警察学校台地よりの洗い出しと思われる。

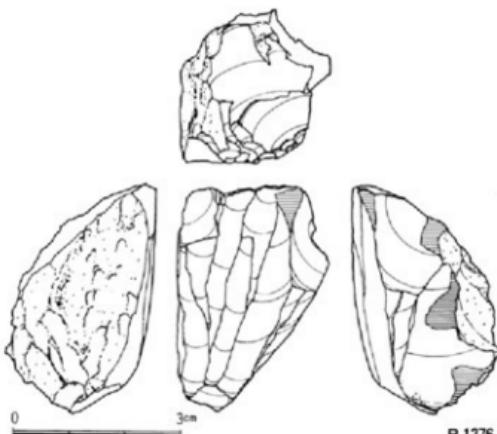


Fig. 3 先土器時代の遺物(1:1)

縄文時代

R1106 遺構はないが、S K20から縄文土器と思われる土器細片 R1106が出土した。器形は不明であるが、外面に2条の横走する瓜形文を施す。胎土に粗砂粒を多く含み明褐色を呈す。細片のため時期の限定はできない。

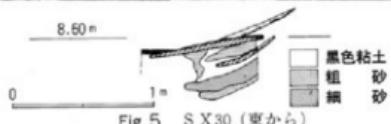


Fig. 5 SX30(東から)

弥生時代

遺物総量は、本調査区出土遺物の30%余りを占めるが、その殆どは後世遺構、特に溝の水流による洗い出しである。その遺存状態は良好で、大きな移動量は考えられず、台地上に該当時期のつまり弥生時代全般にわたる遺跡の立地が窺える。台地上に遺構は遺存しない。調査区東辺に露出する砂の堆積は、この時代の末に形成された可能性が大きい(SX29)。又、SX29砂層中から深掘り部においてSX30を検出した。

S X30 SX29中の検出である。棒状の木材を並べその上下に藁のようなものを敷き並べた状態が2段みられる。全体が西へ向かって倒れかかった状態を示している。しがらみ状の構造である。構築材の一部に木製品が利用されている。R1275はSX29出土の甕である。胎土に石英粒

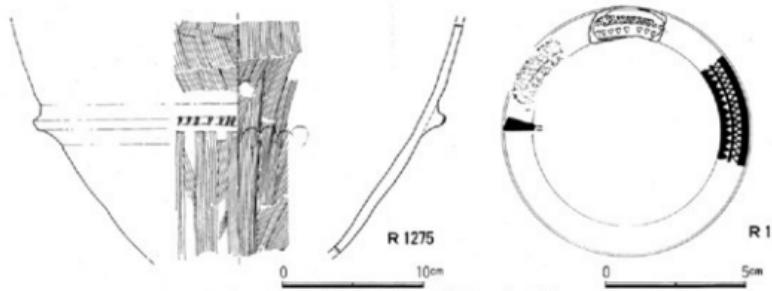


Fig.6 弥生時代の遺物(1:4、1:2)

を多量に含み黄褐色を呈す。

R 1277は中世遺構検出の銅鏡片である。外区部分で、図上復原径8.9cm、縁部厚さ0.5cmを測る。縁部は大部分剥落している。

古墳時代

台地上に遺存する遺構はなく台地に沿って沖積地を南流するS D26を検出した。遺物は他に後代の遺構、特に奈良・平安時代の溝からも多量に出土している。本調査区出土遺物中最も多く、総量の60%はこの時代に属する。



Fig.7 S D26 B 全景(東から)

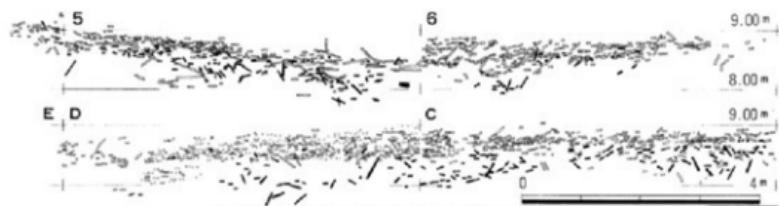


Fig. 8 S D26遺物出土状況立面図(1:200)

S D26 矢板内の調査区と北側トレンチとで調査を行なった。北側トレンチから東南へ向い、C 6区・C 7区で南へ曲がる。その南端部は、後世のS D01により削除されている。規模は、最大幅14m、深さは調査区中央の最深部で1.3mを測る。断面は西岸でやや急な東岸で極く緩い傾斜を成している。覆土は、砂混り部分を間層にもつ黒色粘土で、増水時の水流があるだけの様な状態が考えられないだろうか。調査時点では、上記の様にある間層を境に上位をA、下位をBとして分離した。遺物は西岸寄りに集中し、大量の流木、木片に混じって多数の木製品、土器が出土した。このような出土状況、及び出土土師器の構成及び特徴は、D 10a区、D 10b区のS D01のそれとよく似ており、これらがひとつづきの流れであったことを示唆している。

遺物には、土師器に加えて須恵器の出土があったが、出土状況・器形の明確なものは甌（R 463）がある。又、二次的な熱を受け、製塙土器かとも考えられる資料R 545がある。玉類（Fig. 10）は、滑石製盤状の資料がある。木製品は、鉢類を主に約240点出土した。整理途上であるが、保存上の問題があり、現状を写真で示しておく。



Fig. 9 遺出土状況

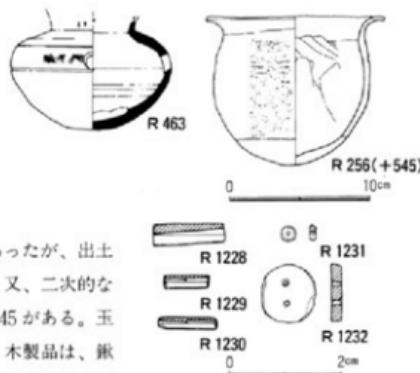


Fig. 10 S D26出土遺物

R 256+545	土師器 甌 完存 二次的被熱	12.7	R 1230	菅 玉 両方向からの穿孔、蛇紋岩製?	0.4
R 1110	須恵器 甌 脊部完存	11.5	R 1231	白 玉 片方向からの穿孔、滑石製	0.6
R 1228	菅 玉 片方向からの穿孔 菓 王 製	0.8	R 1232	有孔円盤 対向する片方向からの穿孔、滑石製	2.0
R 1229	菅 玉 両方向からの穿孔 蛇紋岩製	0.5			

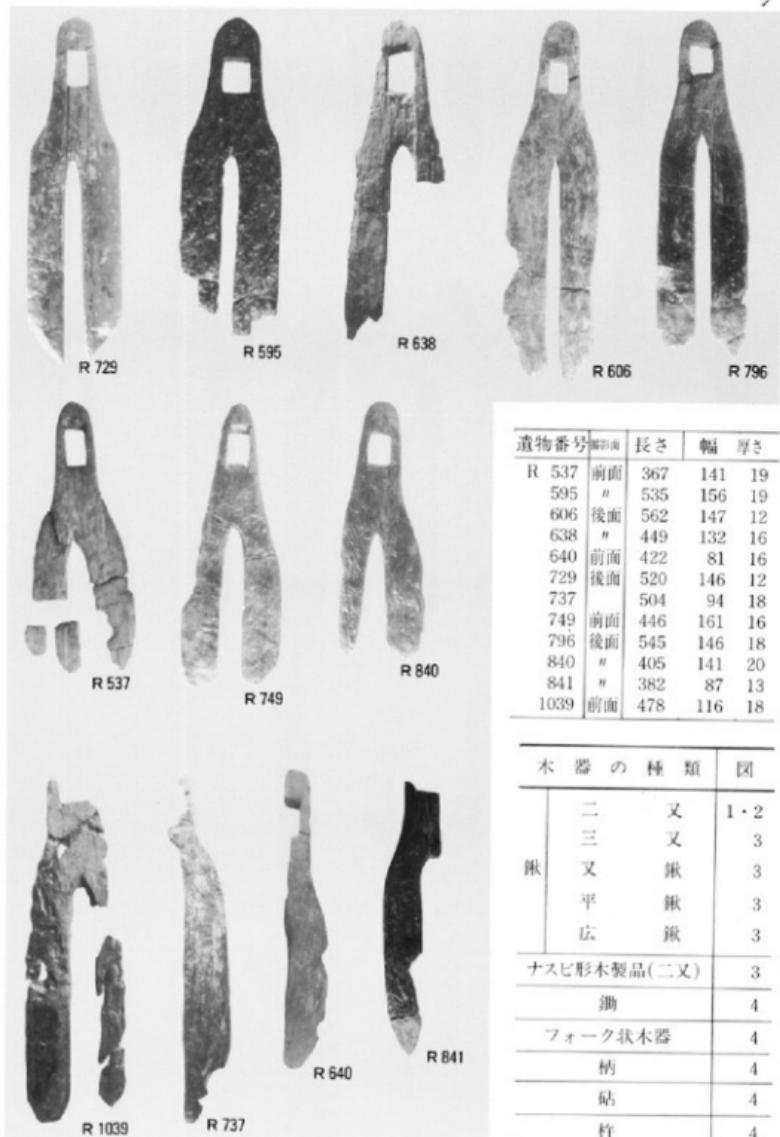
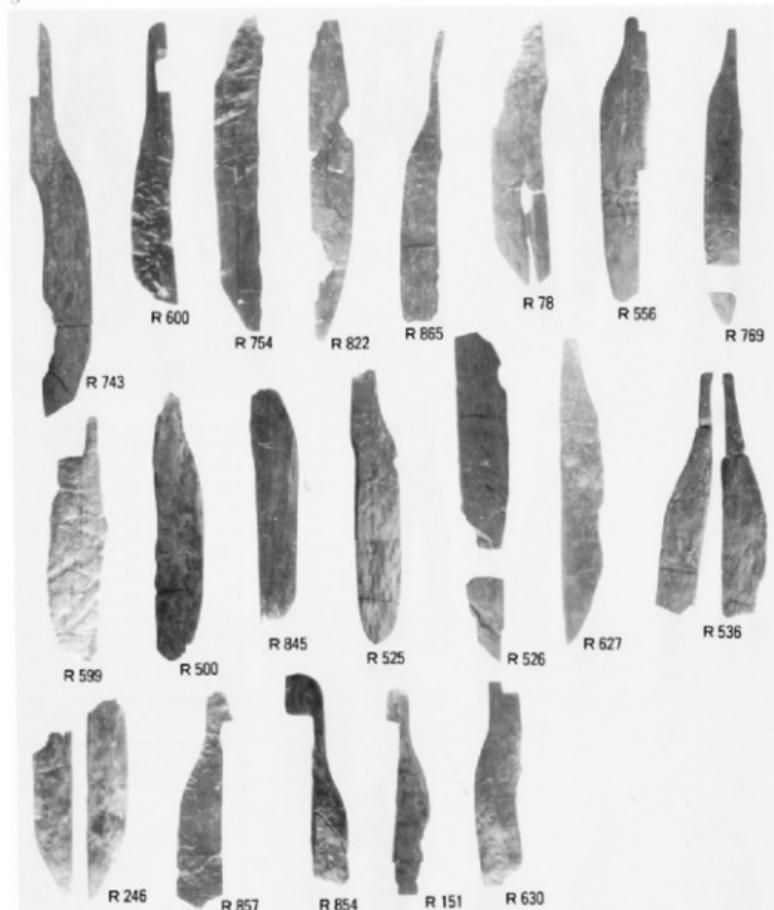
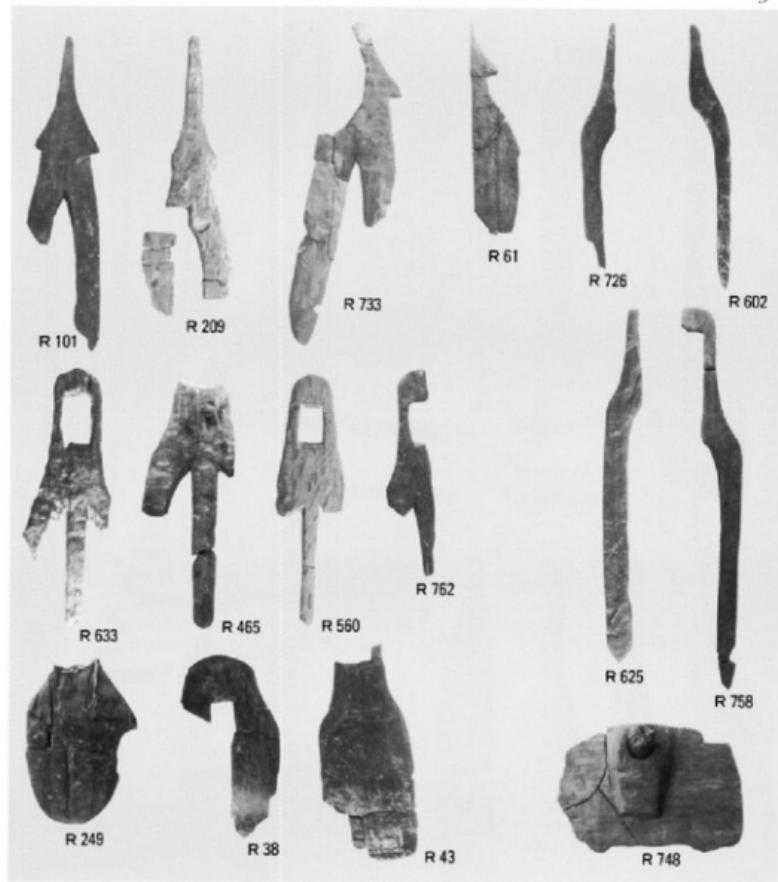


Fig.11 SD 26出土木製品 1



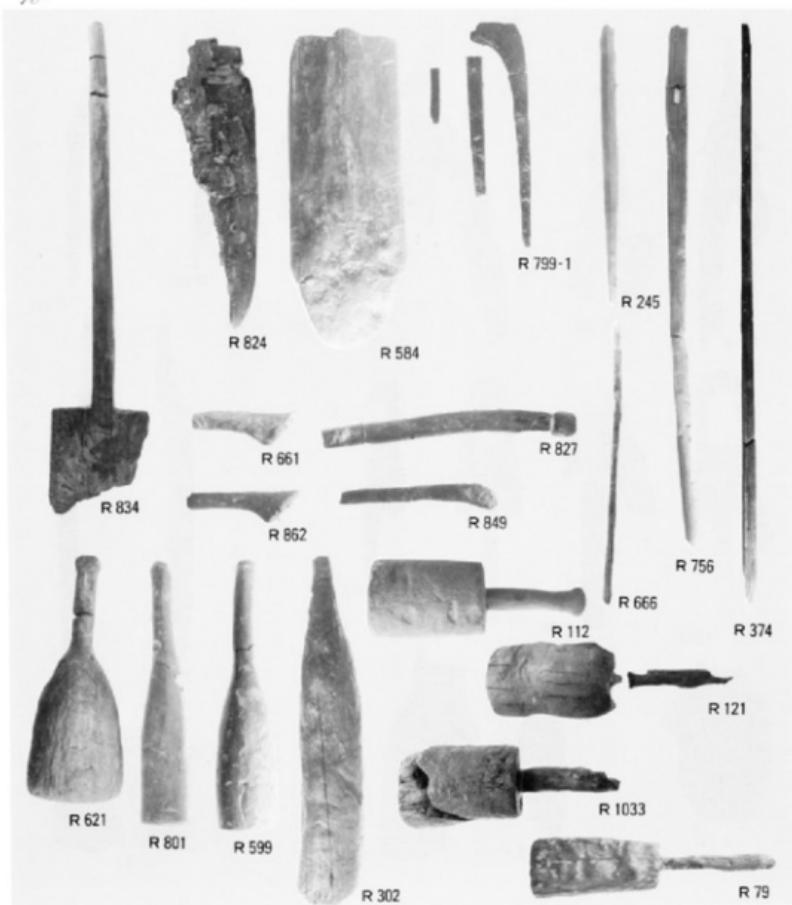
遺物番号	裏面		長さ	幅	厚さ	遺物番号	裏面		長さ	幅	厚さ
R 78	裏・二叉		357	85	14	R 627	裏	二叉	475	74	17
151	"		280	68	16	630	"	"	296	80	17
246	"		312	129+	15	743	裏面	"	547	84	22
500	"		364	75	16	754	"	"	467	75	16
525	腹面	"	391	74	15	769	"	"	521	63	19
526	"		428+	73	12	822	"	"	521	63	19
536	"		334	121+	12	845	"	"	322	71	12
556	"		384	70	21	854	裏面	"	306	90	17
599	前面	"	318	94	18	857	"	"	311	80	17
600	"		436	83	18	865	"	"	422	61	13

Fig.12 S D26出土木製品 2



遺物番号	撮影面		長さ	幅	厚さ	遺物番号	撮影面		長さ	幅	厚さ
R 38	前面	平鍬	248	133	13	R 602	前面	鍬 三叉	409	71	15
43	後面	"	595	130	14	625	後面	鍬	460	62	14
61	ナスピ形木製品(二叉)		292	73	13	633	前面	鍬 三叉	333	115	13
101	"		479	104	16	726	"		381	60	15
209	"		461	102	14	733	ナスピ形木製品(二叉)		455	148	12
249	前面	平 鍬	232	158	10	748	前面	広 鍬	176	254	44
465	後面	鍬 三叉	325	121	17	758	後面	又 鍬	532	97	20
560	"		335	90	19	762	"	鍬 三叉	279	72	12

Fig. 13 S D26出土木製品 3



遺物番号	表面		長さ	幅	厚さ	遺物番号	表面		長さ	幅	厚さ
R 79		砧	330	φ 81×56		R 666		柄 ?	400	13	16
112		"	262	φ 97×86		756		" ?	719	24	17
121		"	334	φ 103×74		799-1		フォーク状木器	344	133+	18
245		柄 ?	401	26	9	801		柄 ?	388	φ 77×69	
302		杵	461	φ 87×69		824	腹面	澁	711	104	22
374		柄 ?	1720	40	20	827		柄尻	300	38	24
559		砧	356	φ 83×76		834	腹面	澁	615	116	31
584	背面	黒	467	178	27	849		柄	214	39	8
621		砧	305	φ 121×84		862		柄頭	144	21	-
661		柄頭	127	19	-	1033		砧	278	φ 103×63	

Fig.14 S.D.26出土木製品4

奈良・平安時代

調査区に西接する台地上に立地を推定される高畠庵寺に関係する、と思われる遺物を出土する遺構が、台地縁辺部及び沖積地に遺存している。沖積地では S D01が、台地縁辺部にはそれに沿うように S D14・S D15・S D25が検出された。又、S K20・S D23も判然とはしないが、そういうった溝のつづきである可能性が考えられる。



Fig.15 S D01C 全景（東から）

S D01 南70mのB12 b区から台地縁辺に沿って北流してくると考えられる溝である。S D01は、調査区中央部台地突出部で略直角に向きを変え東流する。この部分で古墳時代の溝S D26を断ち切っている。本区でもB12 b区同様上位からA・B・Cの3区分ができる。この区分はS D01の変遷過程を示しているよう、水量豊富なCの時期から、水量の減少に対応し搬运する土砂が細かくなつてゆくBの時期、淀み状を呈するAの時期と変遷したものであろう。規模は、東岸が調査区外にあり、不明だが、深さは屈曲部の最深部でCの段階に1.5mを測り、これがAの段階に至ると0.7mと浅くなる。



Fig.16 S D01 土層図(1:60)

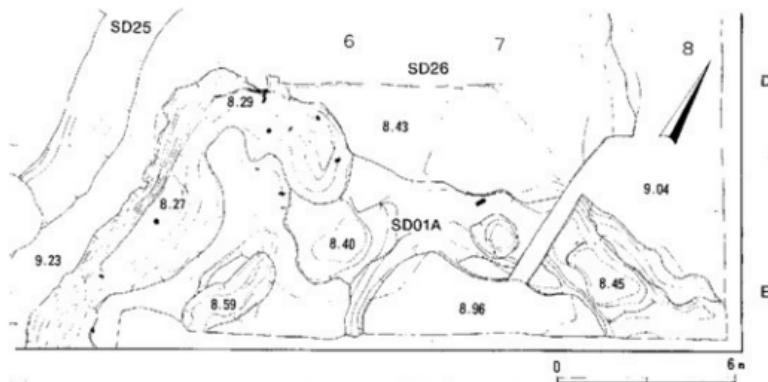


Fig.17 SD01A 平面図(1:200)

等高線は0.1m間隔

遺物 土器類の総量は、コンテナ8箱程であるが、その90%近くが水流による洗い出しの古墳時代、弥生時代の遺物で、残ったものをA・B・Cに区分すると1:1:2の割合となる。このようにB12b区と比べると格段に遺物量が少なく又、B12b区で多く出土した瓦、壇の類もいわば痕跡程度であり、土器類も小破片が大半を占める。B12b区が寺院により近接していたことが考えられよう。土器類の構成は、図示しないものを含めてB12b区と同様である。B12b区の分類でいうならば、上師器では壺A、壺B、壺C、蓋、皿という類、須恵器では、壺A、壺B、蓋、皿、高壺、鉢に加え壺という類がある。更にA類の黒色土器がBから、綠釉碗が南側トレンチ部から出土している。土器についてこれ以上の分類は、出土点数の少ないこともあって行なっていない。資料個々の説明は、表として実測図に付す。

R-21	A	須恵器 壺蓋	ほぼ完存	14.0	R-1264	C	須恵器 壺B		17.9
30	B	土師器 壺A	上半部	30.4	1265		上師器 ハD	完存	9.7
35	B	" " 外底部へラ前調整		17.2	1266	" " A	墨書き	"	13.6
1236	C	鶴羽口	半ば欠損	7.5	1267	" " A		破片	19.2
1248	B	須恵器 壺 墨書き	破片(%)	12.5	1268	" " A		完存	19.2
1251	B	" " B	墨書き「月」或市(%)	13.9	1269	" " 盤		ほぼ完存	19.4
1252	B	" " A	ヘラ記号 破片(%)	14.4	1270	須恵器 ハ		破片	19.3
1255	C	" " A	墨書き「昇」	14.6	1271	" " 蓋		1111完存	15.6
1256	B	土師器 瓶	底部破片(%)	10.8	1272	土師器 ハ		完存	13.0
1258		縁物 瓶	底部破片(%)	7.6					
1259		黒色土器A類 瓶	口縁破片(%)	11.7	R-1111	鐵矛	袋部一部欠		
1261	C	須恵器 蓋	頸部欠	7.6	1233	上師質 土鍾	完存	1.2	
1262	C	" 壺B	破片(%)	9.6	1234	須恵質 " "	"	1.7	
1263	"	体	口縁部破片(%)	8.4	1235	土師質 " "	"	2.3	

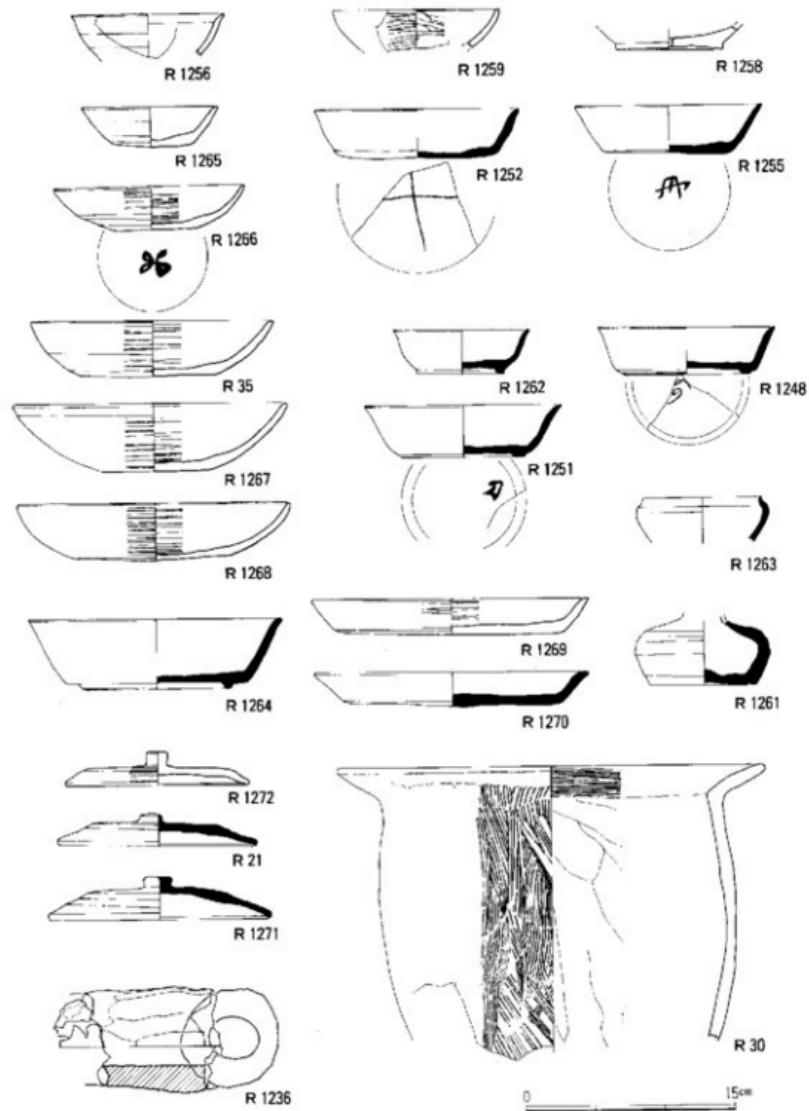


Fig. 18 S D01出土遺物(1:4)

土器以外の土製品として縦羽口と土鉢がある。前者には、鉄鋤様のものの付着が認められる。後者には2者あり。土師質（R1235・1233）と須恵質（R1234）とがある。金属製品としては、小形の鉄斧が出土した。袋部が一部欠けている。刃緣が弧状を呈する。

墨書土器 実測図を示すものに他に16点を認めた。甕胴部に描かれたR545の他は、すべて环底部外面に書かれている。环に書くもののうち、土師器のそれ4点に対して須恵器のそれは15点と、明らかに須恵器の方が多い。これはB12b区の墨書土器と同様の傾向である。また墨書の種類であるが「刀」と記す例が最も多く4点、次いで「○」、「鳥」と記すものが、それぞれ2点ある。以上3種の墨書はB12b区でも出土している。更に一筆書き様の例も、B12b区によく似た例がある。墨痕の不明瞭な例は別として、「田」そして「丹」とあるもの各一点づつの出土があった。以下に墨書の写真を掲げる。

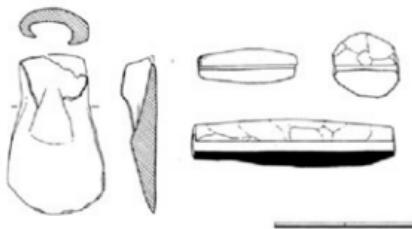


Fig. 19 S D01出土遺物(1:2)

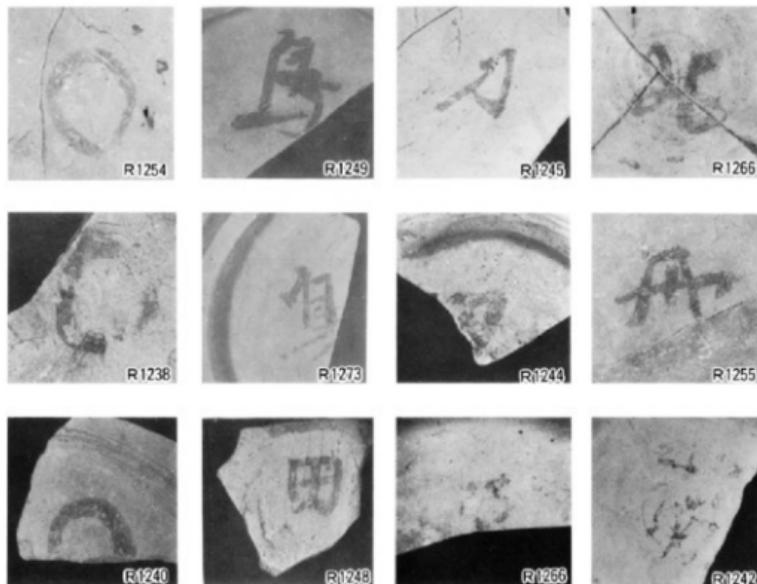


Fig. 20 黒書

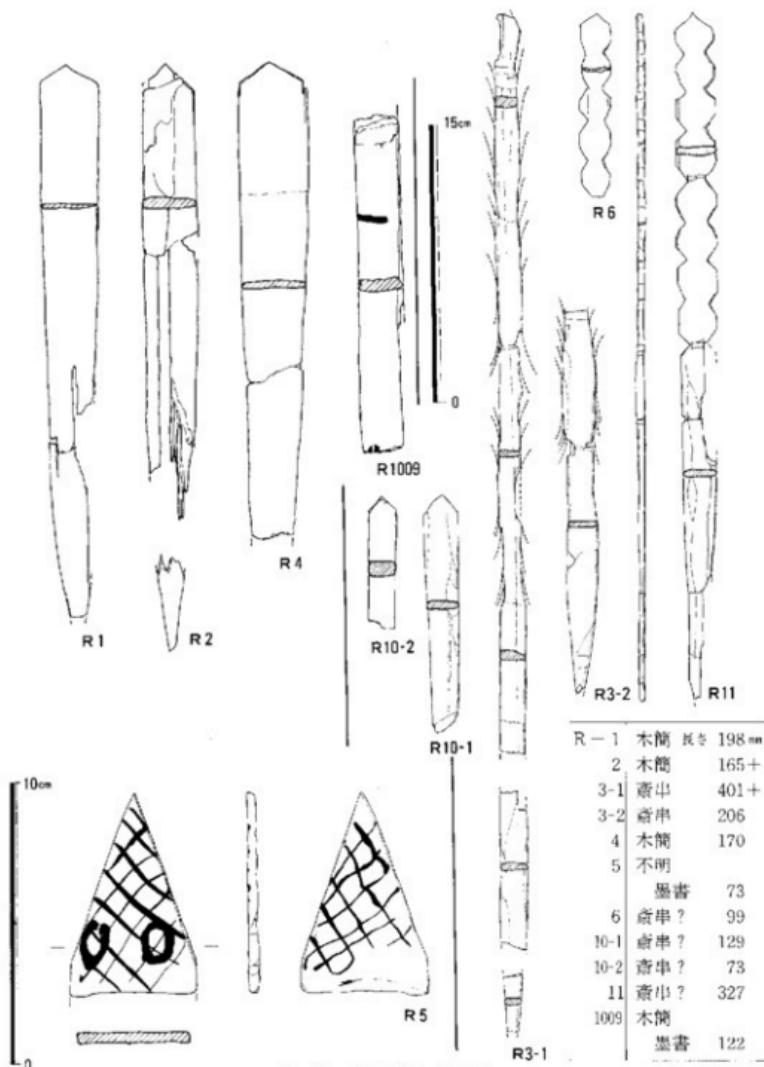


Fig. 21 SD01出土木製品 1



Fig. 22 曲物出土状況（東から）



Fig. 23 端串出土状況（北から）

木製品 板材状のものを除く資料は22点出土した。そのうち14点が曲物及びその部分である。底板の形状からする限り、円形のものと長方形のものがある。出土状況を示すR9は円形の曲物で略完形で出土した。

木筒は3点ある。墨書はみられず、形状でそれと判断した。他に三角形で碁盤目状の墨書を描くものがある。

端串は同一個所から複数個体がまとまって出土した。3点を数える。

他の未分類の木製品もあわせて、その殆どはSD01Aよりの出土である。

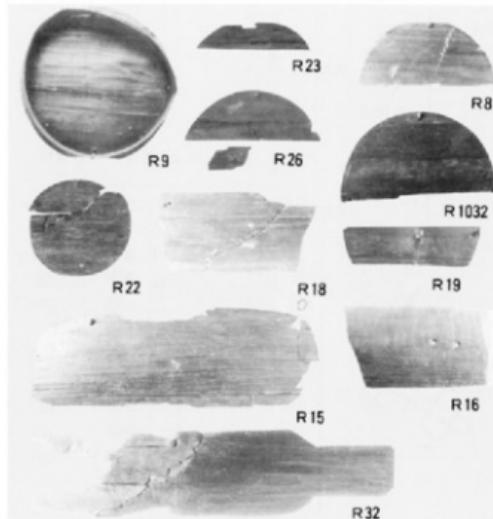


Fig. 24 SD01出土木製品 2

曲 物	
遺物番号	
R - 8	193×93×13 内面 ケガキ
9	(径 220) 内面
15	420×145× 6
16	219×520× 6 内面?
18	232×123× 6
19	92×66× 6 内面?
22	径 141× 4
23	53×39× 6
26	83×69× 4 内面
32	512×226× 7
1032	198×111× 8 内面 ケガキ

S D14・S D15 台地縁辺に沿って走る溝で、互いに近接、重複している。そこでの関係から S D15が S D14に先行することが考えられる。S D15は、断面形が低い台形状を呈し幅1.3m、深さ0.1mを測る。覆土は暗茶褐色である。遺物は数10点の土器細片がある。S D14は底面が水流により大きく変形し、覆土は砂・シルト・粘土のレンズ状堆積を示しており、流水の増減の繰り返しを、考えられよう。遺物はコンテナ程度の量であった。瓦・埠の類を欠く S D15に対し、総量の $\frac{1}{2}$ は瓦・埠の類で、残りが弥生土器・土器師・須恵器の小破片である。このうち示準的な遺物として2点が示せよう。R1117はA類の黒色土器で、胎土精良、外面淡褐色内面黒色を呈す。R1116は高台碗で、胎土に砂粒をわずかに混じえ、外面灰黄褐色、内面茶灰黄褐色を呈する。

S K20・S D23 S K20は断面低い逆台形を呈する。遺物は少量の土器細片が出土した。S D23は S K20より以前の溝状の遺構である。S K20が長方形を呈するのに対し、不整な部分が目立つ。極く浅く、覆土は S K20と同じくロームブロックを混じえた茶灰色粘質土である。少量の遺物が出土する。瓦の細片を含んでいる。S K23については、平面図上の関係より、S D14のつづきである可能性がある。

S D25 台地縁辺の沖積地を巡る溝である。調査区南部では、S D15と S D01に挟まれた位置にありかつ、これらと平行している。台地突出部で西寄りに向きを変え調査区外に向かう。付図土層図に示すように、砂と黑色粘土の互層により埋没しており、その段階でも



Fig. 25 SD14・SD15 (北から)



Fig. 26 SD14出土遺物

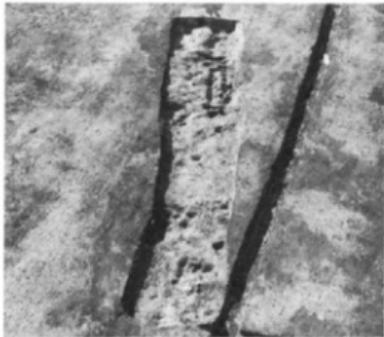


Fig. 27 SK20 (南から)



Fig. 28 SD25 (南から)

流水のあったことが
考えられる。こうい
った状況は特に北半
部に顕著である。全

Fig. 29 SD25出土遺物 (1:4)
体として断面は低い台形状を呈し、幅2m前
後、深さ0.4mを測る。遺物はコンテナ1号程
の出土量であった。遺物には洗い出しによ
る弥生土器、古墳時代の土師器、須恵器を主
に奈良時代までの遺物に混じって土師器高台
碗が出土した。R1121は口縁部細片、R1122
は底部破片である。いずれも胎土は精良、内
外面とも淡褐色を呈する。

S K28 平面形不整な橢円形の土塙である。
肩近くの壁は直立する。長さ3.9m、幅2.8m、
深さ1.4mを測る。覆土は最上部が灰色シルト
で以下は砂と茶褐色粘土の互層となる。S K
28はSD25と重複している。SD25がSD28
に先立つものである。遺物は覆土中より散漫
に出土した。総量はコンテナ1号程である。土
師器が3%、瓦・壇が3%を占める。

R1223	土師器 碗	底部破片(%)	7.3
1224	" "	" (%)	7.5
1225	" "	口縁部細片	
1226	青磁 碗	越州窯系底部破片(%)	8.0

中世 土塙SK12、SK13を検出した。

S K12 不整な土塙で、複数の土塙が連接し
たような平面形状である。断面形は鉢状を呈
する。長さ9.6m、幅5.3m、深さ0.6mを測る。
覆土は、上部が暗茶褐色土で下部になるにつ
れて灰色味が強くなってくる。遺物は覆土中よ
り散漫に出土した。高畠庵寺の礎石と思われ
る花崗岩大礎が底で検出された。

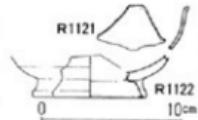


Fig. 30 SD 25 (北から)

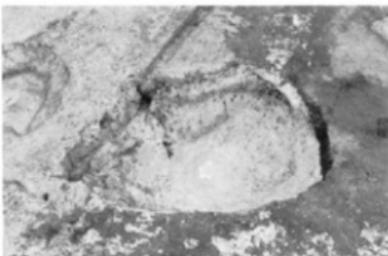


Fig. 31 SK 28 (東から)

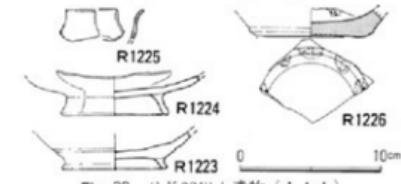


Fig. 33 SK 12・SK 13 (北から)

R1003	瓦質火器	口縁部破片
1004	・	縫鉢
1112	土師質 鍋	口縁部破片(%)
1113	白磁 碗	所々色味ある性 能
1114	青磁 碗	(白磁と同様の性 能) 瓢箪形片
s K13	青磁 碗	(龍泉窯系) 条紋色釉
1115	白磁 碗	淡緑灰色や淡 底邊破片(%)
1119	白磁 碗	淡緑灰色や淡 底邊破片

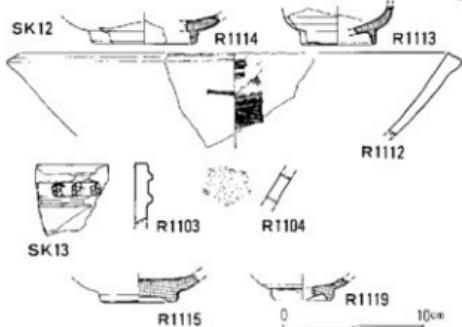


Fig. 34 S K12 - S K13出土遺物 (1:4)

S K13 不整な楕円形を呈する土壙である。長さ4.1m、幅2.5m、断面鉢形を呈し深さ0.8mを測る。覆土の性状はS K12に同じで、同様覆土中から遺物が散漫に出土した。弥生時代から奈良時代の遺物に混じって陶磁器が出土している。

IV層水田 調査区沖積地上で検出した。現水田床下に砂層があり、これに覆われて水田面が遺存していた。水田面は台地際では不明確であり、調査区東辺部では、段落ちにより断ち切られている。A 5区・A 6区で畦畔と思われる部分が東西方向に走ることを確認した。それ以外の水田の区画は認められなかった。水田の時代については、東辺部段落ちから土師器高台礎破片の出土があった。

高畠廬寺の遺物 中世の遺構から、高畠廬寺に関係すると思われる遺物の出土があった。

軒瓦 R1102・R1101とともにS K12から出土した。軒平瓦である。ともに右行する扁行唐草文を内区主文とするが、後者ではいわば退化している。外区下縁の凸鋸歯文も前者が上向きなのに對して後者は下向きという点で異なる。いずれも胎上に砂粒を含み、焼成は軟質で明灰色或いは淡灰色を呈する。

礎石 S K12からは、建物礎石とみられる資料も出土した。花崗岩製で現状は半削された状態で、長さ1.45m、幅0.63mを測る。やや扁平で、全体を亀甲状に整えているように見える。

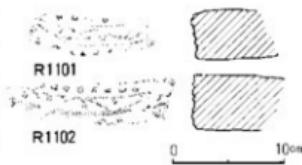


Fig. 35 軒瓦 (1:5)

III G 7d 区調査の概要

本調査区は、板付遺跡中央台地南よりの東側から約100mほど西側の沖積地である。1979年に調査を行い、夜白I～板付I式期水田を検出したG 7a・b調査区の西40mにあたる。

1983年、地権者から専用住宅建設の申請が提出され、試掘を行った。遺構の存在が確認されたため、84年7月24日から8月6日まで延べ11日間調査を実施した。調査面積370m²。

層序

現水田下は、床土・暗灰色砂質土が全体を覆う。道路状遺構SF 01はその直下で検出された。SF 01の東西は灰褐色砂質土が堆積し、とくに東側のは多い、その下に粗砂～細砂がみられる。砂層下は斑鉄を多量に含む水田面（暗茶褐色粘質土）である。SF 01西側は砂層堆積がみられないため、上層との分離は困難であったが、かろうじて水田面を確認した。水田上面レヴェルは標高8.4mである。水田土壤下は、暗青灰色シルト、同細砂、灰色砂層となる。地表下2.5mまで掘り下げたが、さらに砂層が1m以上下ることが知られた。湧水が著しく、明り掘削では危険なため掘り下げを断念した。砂層からは弥生中期中葉を下限とする土器が出土し、この墳埋没した河川流路であることが知られる。また調査区西半に、南北方向の灰色粗砂層が深く（3.5m以上）堆積する。弥生後期後半を下限とする土器を包含し、その墳埋没した河川（SD 07）と判断しうる。

検出遺構

道路状遺構（SF 01）、水田（SX 02・04・05）、溝（SD 03）などがある。SF 01と水田は一体の遺構である。直接年代をしめす遺物はないが、弥生後期河川 SD 07より新しく、奈良期溝SD 03よりも古い。水田耕土中から7世紀後葉の遺物が出土しており、この前後の使用と推測される。

SF 01は幅3～5mと一定しないが、ほぼ南北にのびる。検出面から東西水田との比高は20

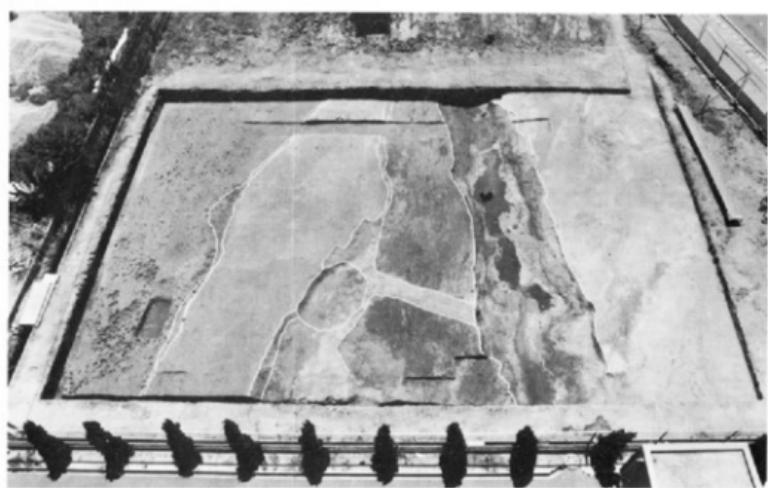
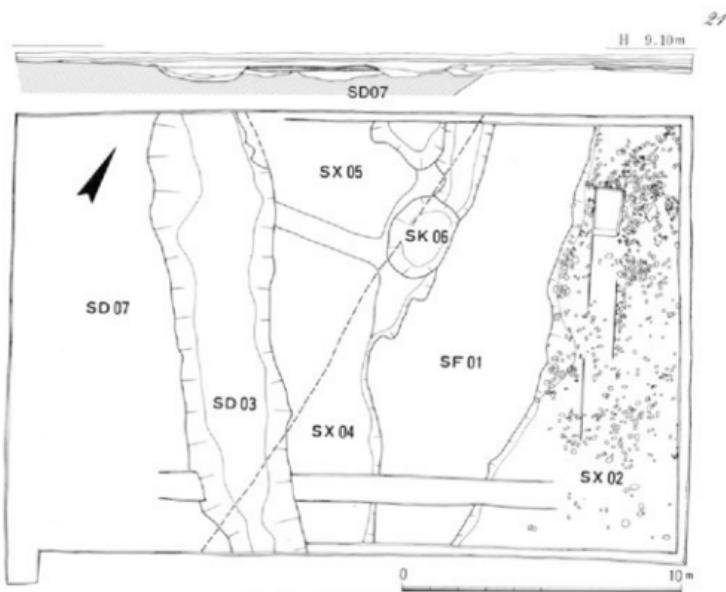
～30cmあまりである。

SF 01東側の水田面には多量の足跡のか、鎌による耕起痕がみとめられた。調査区東北隅に集中して検出されたが、必ずしも規則的耕起でない。鎌先は幅14～16cmのU字形である。

奈良時代溝SD 03は、幅4m前後、深さ0.6mの深皿状断面形である。福岡条里に等しい方向だが8世紀末頃には埋没している。



Fig.36 調査区全景（東から）



IV F 7 f 区調査の概要

調査区の位置・概要 F 7 f 区は板付造跡環溝の南端より40m程の位置にある。板付南台地との間の鞍部に向かう傾斜面に位置するため、宅地造成による0.7m程の段差で西側のF 6 a 区に接している。又、南に接するF 7 e 区と略同高度となっている。

調査の結果、弥生時代の貯藏穴・土塙計10基と住居址1棟、古墳時代の住居址1棟、中世の井戸2基、近世、近代のものを含めて溝2条、他に各時代の小穴を検出、資料を得た。以下、年代順に概要を述べる。



Fig. 39 F 7 f 区全景（西から）

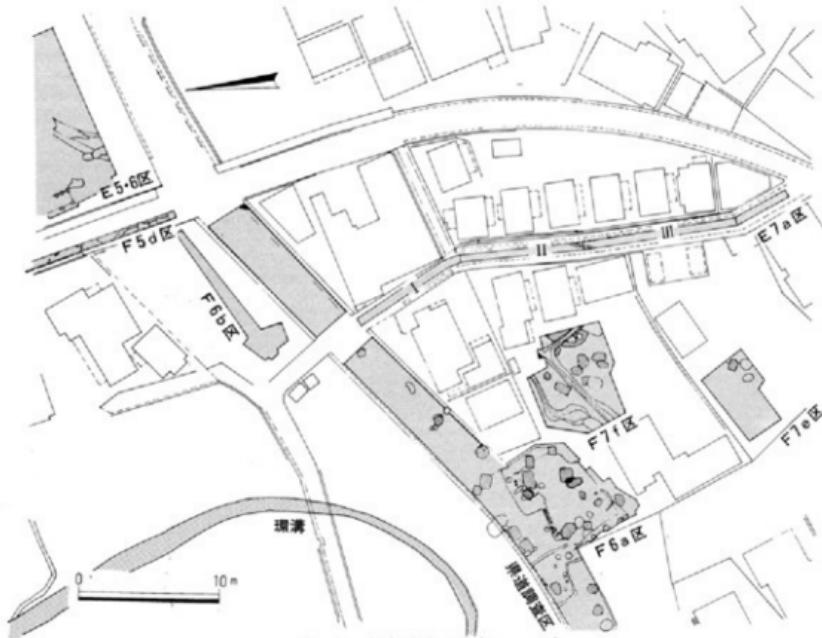
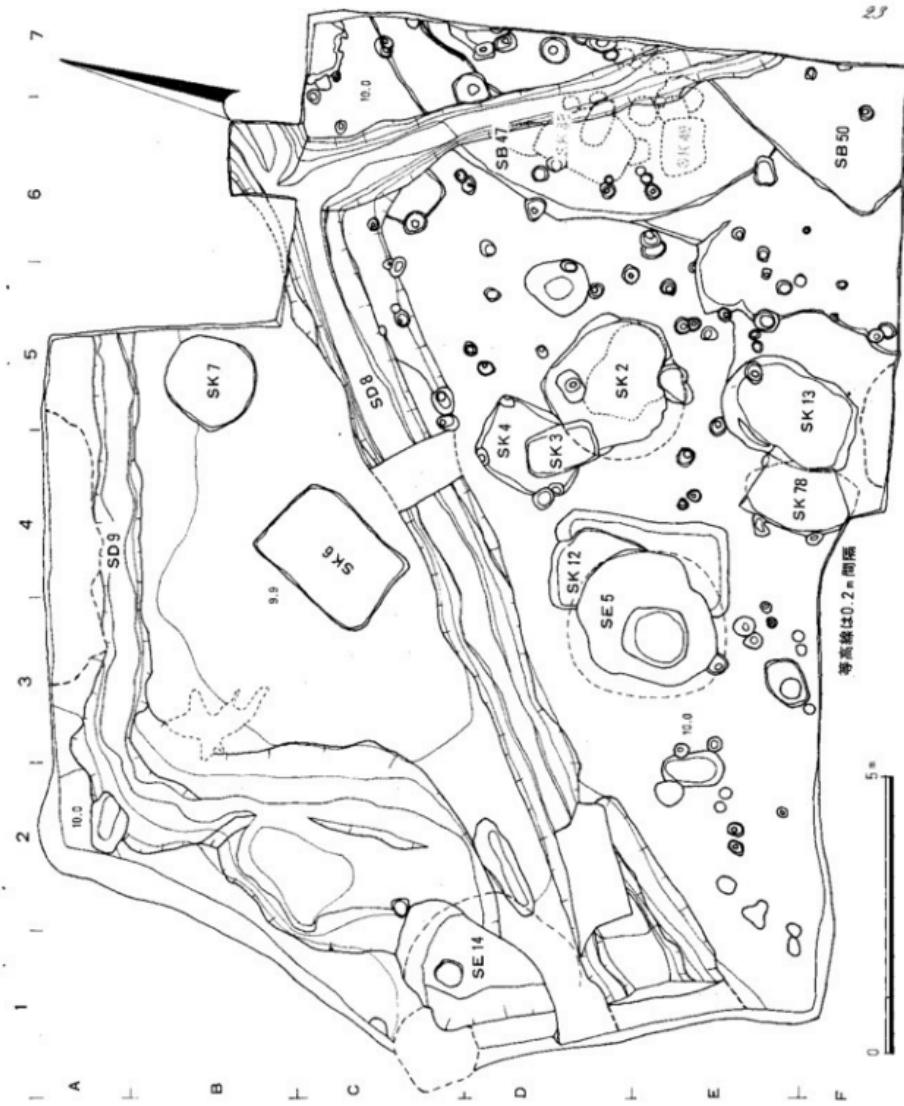


Fig. 40 調査区周辺図（1:1000）

Fig. 41 地点区全体図 (1 : 100)



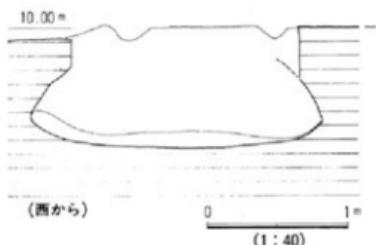
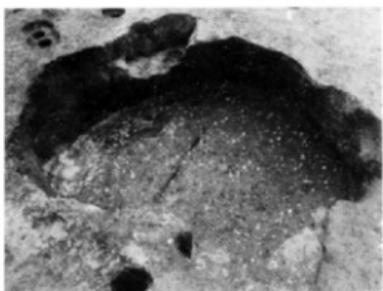


Fig. 42 SK 2 (北から)

弥生時代 遺構数は前述した通りであるが、貯蔵穴としたものには2者ある。ひとつは円形で袋状を成すもの、他は長方形で壁が直立するものである。形状不明のSK78を除いて前者にはSK2・SK7・SK12・SK13の4基、後者にはSK4・SK6の2基を挙げることができた。個々について述べる。

SK2 平面形が不整な横円形を呈する袋状の堅穴である。ために断面形は逆台形となる。覆土は黒褐色粘質土でローム粒を顯著に含む。堆積の状況は水平に近い。確認面での開口部は、長さ1.7m、幅1.0m、平面形の最大となる床面で径2.5m、深さ0.9mを測る。遺物は覆土中より散漫に出土した。

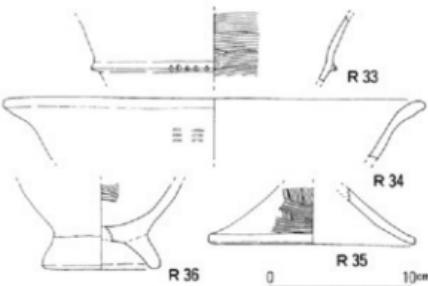


Fig. 43 SK 2 出土遺物 (1 : 4)



Fig. 44 SK 4 (東から)

SK4 隅丸長方形を呈する。四隅に柱穴をもち、壁は略直立する。断面形は丸味のある長方形となる。覆土はロームブロック混りの黒褐色粘質土が全体を埋めている。遺物は覆土中より土器細片が出土した。時期は土器より前期が考えられる。柱穴についても同様である。

SK6 隅丸長方形で、壁は直立し、全体的に箱形を成す。覆土は一部にロームブロックがレンズ状に入る暗茶褐色土である。長さ2.5m、幅1.7m、深さ0.6mを測る。遺物は覆土中位に完形あるいはそれに近いかたちで、甕と瓶とが計4個体出土した。これより、前期後半の時期が考えられる。個々の説明は、表にし下に掲げる。

R37	弥生土器	甕	(底部に施成前の穿孔) ほぼ完存	径 26.5
38	"	甕	(ほか同一個体の可能性ある箇所R38がある)上半部ほぼ完存	径 24.6
39	"	甕	外表面状の付着物、下半部内面にも付着物 ほぼ完存	径 26.4
40	"	甕	上半部ほぼ完存	径 19.8

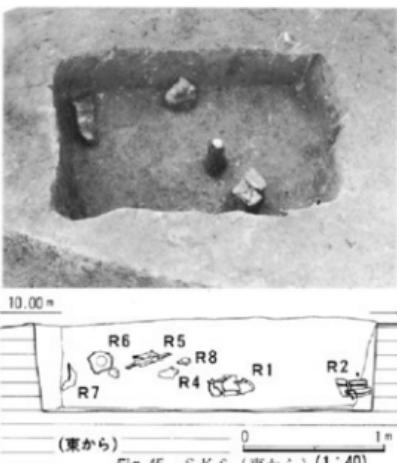


Fig. 45 SK6 (東から) (1:40)

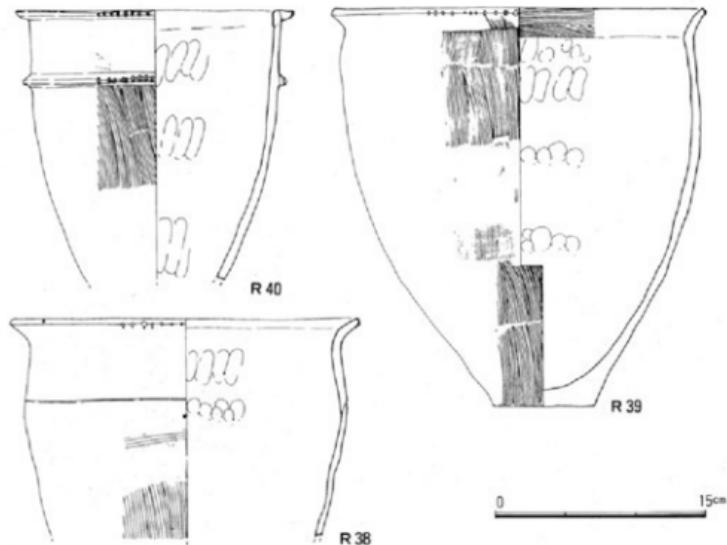


Fig. 46 SK6 出土遺物1 (1:4)

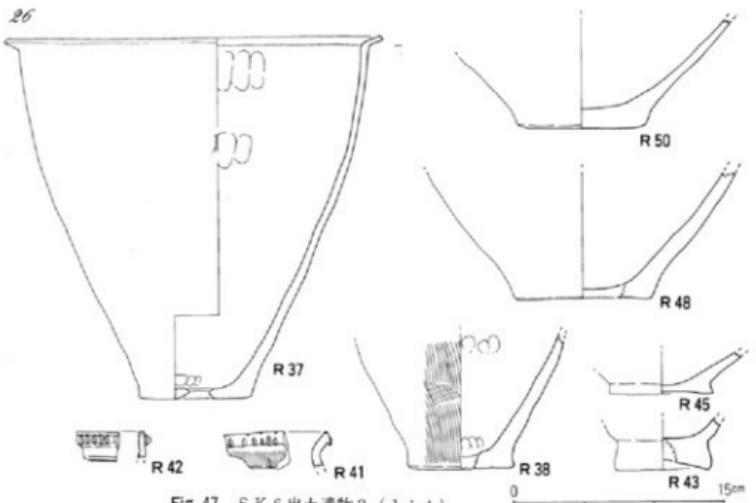


Fig. 47 SK 6出土遺物2 (1:4)

	R 30	弥生土器	壺	(施成後穿孔)底部破片	径	8.1	R 45	弥生土器	壺	底部	径
41	"	"	甕	口縁部破片		48	"	"	"	"	9.4
42	夜白式土器	"	"	"		50	"	"	"	"	9.1
43	弥生土器	"	"	底部破片(?)	6.6						

SK 7 平面形が不整な楕円形を呈する袋状の竪穴である。おおよその径1.5 m、深さ0.2 mを測る。深さについては、他とは大きく異なり浅く、また比較的小さい。覆土は黒褐色粘質土で、一部にロームブロックを挟んでいる。覆土中より土器片が出土しており、中期が考えられる。

SK 12 半ば以上をSE 5により削り取られているが、原状は円形か又は長楕円形を呈していたと考えられる。遺物は少量の土器片が覆土中より出土した。

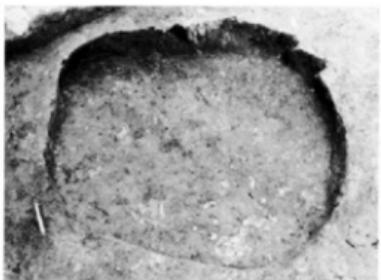


Fig. 48 SK 7 (西から)

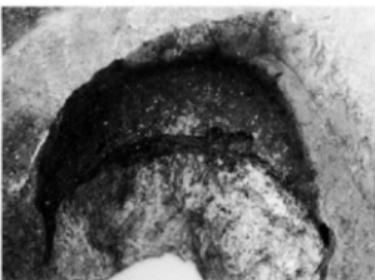


Fig. 49 SK 12 (南から)

S K13・S K78 S K13は平面形が不整な梢円形を呈する、壁は略垂直に立ち上っている。長さ2.6m、幅1.7m、深さ0.8mを測る。覆土は黒褐色土で、部分的に黑色土、ローム粒を混じる。遺物は覆土中より出土している。S K78は、調査面では確認できなかった遺構で、S K13の調査時点での確認した。覆土は黒褐色土でS K13と同じである。残った部分から考えると、袋状の竪穴であった可能性が大きい。

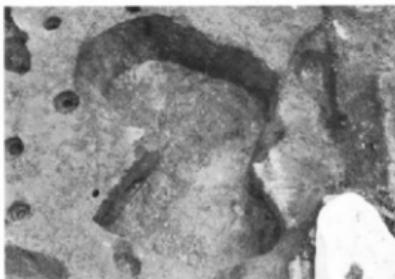


Fig.50 S K13・S K78 (西から)

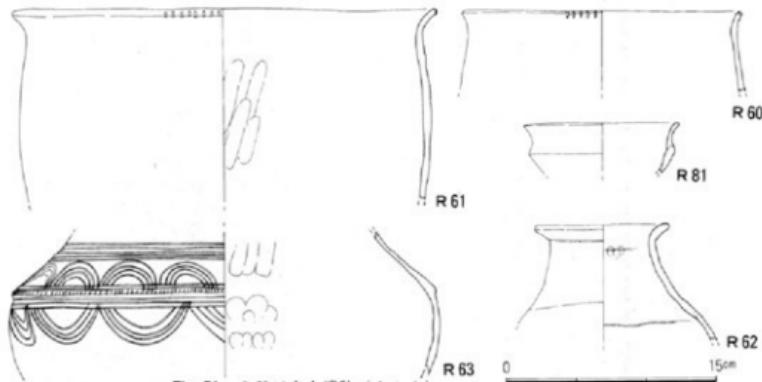


Fig.51 S K13出土遺物 (1 : 4)

R 60	弥生土器	甕	口縁部破片	径 20.1	R 63	弥生土器	壺	胴部	径 30.8
61	"	"	"	30.3	81	"	鉢	口縁部	11.1
62	"	蓋	上半部	9.7					

S K30 東端部を S D 8により削除されている。平面形隅丸方形を呈する。1辺の長さ1m、深さ0.2mを測る。覆土はロームブロックの層下に暗褐色土が堆積する。底面に土器片が密集して出土した。多数個体の破片であるが、前期末までのものである。

R 65	弥生土器	甕	口縁小破片	径 24.8
66	"	"	"	19.4
68	"	壺	底部細片	6.8
69	"	"	口縁小破片	



Fig.52 S K30 (東から)

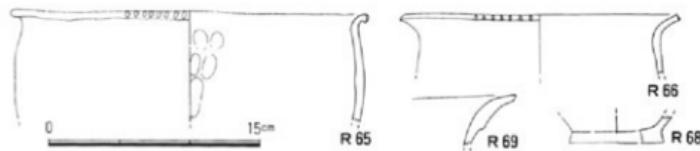


Fig. 53 S K48出土遺物 (1:4)

S K48 S B47の下位に位置する長方形の土塙である。断面は高い台形状を呈す。長さ1.6m、幅1.3m、深さ0.2mを測る。中期前半の遺物を出土た。

R76	弥生土器	甕	口縁破片(3/4)	径 22.8
77	"	壺	底部小破片	9.4

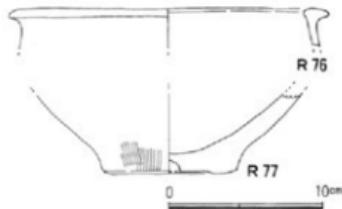


Fig. 54 S K48出土遺物 (1:4)

S K49 隅丸長方形の土塙で断面箱形を呈す。長さ1.1m、幅0.8m、深さ0.7mを測る。覆土中より中期の土器が細片で少量出土した。



Fig. 55 S K48 (東から)



Fig. 56 S B47 (北から)

S B47 円形の竪穴住居址である。復原径9m、深さ0.2mを測る。これに重なって別の住居址の周溝かと思われる小溝が残る。6及至7本の主柱が考えられる。

R72	弥生土器	甕	口縁小破片	径 29.6
73	"	"	"	29.4
74	"	壺	底部小破片	9.0

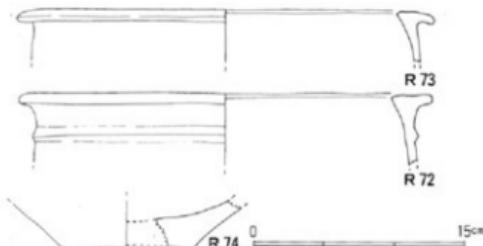


Fig. 57 S B47出土遺物 (1:4)

S X 1 調査区東南隅部にひろがる黒褐色粘土の極く浅い落ち込みである。調査時の観察では、S B 47の壁を S X 1 にかかる部分では追うことができなかったことから、S B 47より形成の新しいことを考えた。遺物は、覆土中より出土し、総量はコンテナ 1 箱程である。遺物は前期から中期までのものである。F 7 e 区包含層との関係を考えられる。

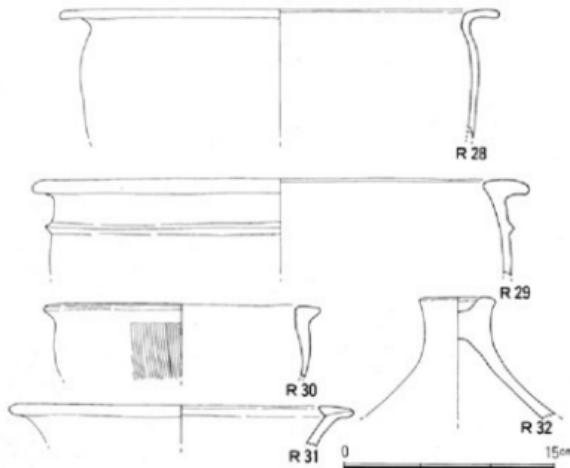


Fig. 59 SB 50 (南から)

古墳時代 住居址 1 棟を検出した。

S B 50 方形の竪穴住居址である。深さ 0.2m を測る。中央近くに焼土を検出した。覆土中より遺物が出土した。柱穴は確実なものは検出できていない。

R 21	土師器 小形丸底壺	赤色顔料 完存	径 10.9
22	" 高环		18.1
82	" 壺 破片		15.0

R 28	弦生土器	壺 口縁部小破片	径 31.3
29	"	" "	35.4
30	"	" "	19.7
31	"	壺 "	24.5
32	"	蓋 上部	5.4

Fig. 58 S X 1 出土遺物 (1 : 4)

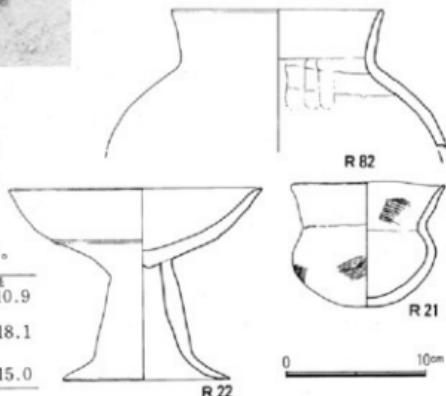


Fig. 60 S B 50 出土遺物 (1 : 4)

中・近世 土塙1基、井戸2基、溝2条を検出した。他に柱穴とみられる小穴があるが、現場あるいは図面上の検討についても、今のところ建物としての配列は考えられない。

土塙 SK3 平面形隅丸長方形、断面は低い逆台形状の土塙である。覆土は黄褐色土である。土師器壺あるいは碗の口縁部細片が出土した。



Fig. 61 SK3 (東から)



Fig. 62 SE5 (南から)

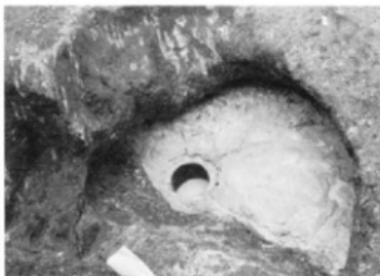


Fig. 63 SE14 (南から)

井戸 SE5・SE14 SE5は、楕円形の平面形で長径2.7m、短径2.4m、漏斗状の断面は深さ3.0mを測る。覆土は灰褐色土である。SE14は現状楕円形を呈し、同様3.2m、2.4m、桶と曲物による2段の井戸側の底面までの深さ3.0mを測る。

溝 SD8・SD9 SD8は、T字形に交わる、断面高い台形の溝である。SD9は断面深皿状の溝である。前者からは18世紀の、後者からは19世紀以降の陶磁器が出土している。

V E 7a 区調査の概要

今回の調査は、市下水道局が計画した板付2丁目下水道埋設に伴い、工事区画を事前に調査したものである。

調査区の位置は、板付遺跡中央台地の環溝南端から南東に30~110mあまりのところで、台地裾と段落ち部にかかる部分である（Fig. 40 参照）。調査は工事区に限られるため、いわば幅1mのトレンチ方式で、延長80mにわたって行った。調査区が長いため、工区単位に北からI~III区とした。

I区・II区の北半は削平が著しく、遺構は消滅している。II区南半からIII区は台地縁から段落ち部にある。台地上から弥生中~後期の土壌、段落ち部に上下2面の水田が検出された。

III区段落ち部の層序は左図のとおり。5層が上層水田（古代末）、6層は水田開発にあたっ



Fig. 64 層位模式図

ての整地層で、12世紀前半を下限とする大量の土器片を包含する。9層が下層水田、10層が粘質のつよい黒色土、基盤は鳥栖ロームである。10層上部、下層水田からは夜白・板付I式土器片のみが出土した。水田を覆う8層（砂層）は板付II式を下限とする土器が出土し、したがって下層水田は板付I~II式期に限定しうる。水田面には若干の足跡のほか、性格不明の凹みが検出された。

この上下2面の水田のあり方は、本調査区から北東に100mほどはなれたE5・6、E5 b区と等しく、同一水田層と想定される。

わずか1m幅のトレンチ調査であったが、台地縁部での水田を把握したことは、板付遺跡復原にとって意味が大きい。



Fig. 65 III区全景（北から）



Fig. 66 古代末水田とその整地層（東から）

VI F 5 d 区調査の概要



Fig.67 F 5 d 区周辺図 (1 : 1000)

県道内下水管埋設部の幅1m余り、延長165mのうち126mについて、土留めの矢板工事後、調査を行なった。工事としては、E6a区(第V章)のそれと一連のものであるが、工期と位置とが分離しているため、別名称を用いる。調査は北端側から始め、工事Ⅰ期との関係で断続的に3回に分けて行なった。そして、それぞれの工区を人孔部等により更に細分し、結果8区分を行なって調査区割とした(I~VII区)。

調査区を設定した県道は、板付遺跡環溝の立地する中央台地の東縁部と考えられてきたところで、東側ではE5・6区、E5b区、西側側ではF5a区、F5d区がそれぞれ設定、調査されている。本調査区では、E5・6区、E5b区の調査成果から、水田の遺存を予想して調査を行なったが、結果的には水田は、I区の北半部に遺存するに留まった。I区水田の上位にあり、以南Ⅳ区台地裾部立ち上りまでの間全体に分布するのは12層である。12層下半部は、弥生土器を大量に含んだ有機質混りの粘質土で、人為的な移動、例えば埋立てというような行為が行なわれたことを示している。12層を切り込んで平安時代以降の、12層下に古墳時代の遺構を検出した。遺物はコンテナにして200箱余りが出土した。以下各区の遺構を列記する。

I区(沖積地) 水田、土塙1(12層上、瓦の出土)

II区(沖積地) 土塙7(12層上)

III区(台地) 土塙1(古墳時代)、柱穴 IV区(台地) 土塙1、柱穴

V区(台地~沖積地) 鋳造鉄斧(12層) VI区(沖積地) 土塙2

VII区(沖積地) 溝1、土塙2 VII区(台地) 土塙2



Fig. 68 I区 水田（中段）南から

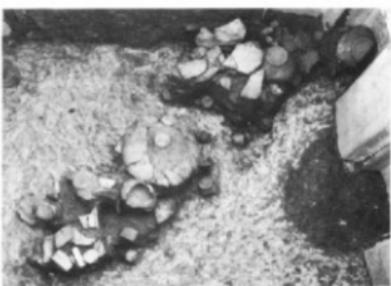


Fig. 69 IV区12層 遺物出土状況(北から)

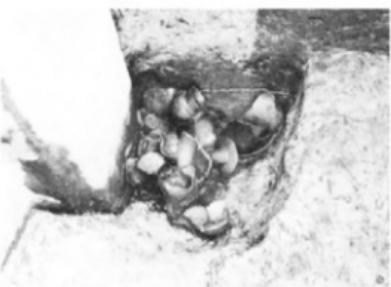


Fig. 70 SK 9 (III区部分) 北から

VII 高畠遺跡第11次調査の概要

高畠遺跡は、板付遺跡南端から100mほどの沖積部をはさんで南にのびる台地上に位置する。これまで10次にわたって台地周囲の調査を実施し、しだいに遺跡の内容を推定しうるようになつた。とくに1982年度に実施した第6次調査（B-12b調査区）によって、台地上に8世紀前半～中葉の創建にかかる寺院址（高畠庵寺）の存在が明らかになった。また各期にわたる出土遺物から、高畠遺跡は夜臼I式期以降、弥生時代を継続して存在し、いわば板付遺跡と同様の歩みを辿つたことが知られた。

今回の調査は、台地上をほぼ全面敷地とする九州管区警察学校の下水埋設工事に伴い実施した。調査は幅1mのトレンチで、延長550mにわたり、1984年12月10日から1月25日まで延べ32日間を要した。

遺構の概要

台地上は古く造成され、かなりの削平が予想された。たしかに中央部は1m前後の削平を受けているが、削平の影響が少ない縁辺部では遺構保存は良好であった。

検出されたおもな遺構は、夜臼～板付II式期の貯蔵穴6、弥生後期の溝2・井戸1、弥生後期～古墳時代中期の竪穴住居址14などである。掘立柱建物の柱穴も少なくないが、幅1mのトレンチではまとまりきれない。



Fig. 71 第7トレンチ全景（東から）

貯蔵穴は3・4トレンチで検出され、台地中央部の高まりに分布した可能性がある。竪穴住居址は第3・4トレンチの東半部、第5トレンチ南半に集中して検出されたが、こうした傾向は地山削平の浅深によって生じた結果であって、本来は台地全体に広がっていたと思われる。

なお高畠庵寺に関連する遺構として溝（SD 25・SD 32）と井戸（SE 20）がある。溝は寺域南限と西限を画すると思われるが、いまのところ確証をもちえない。その溝が寺域を画するものとすれば、東西約130m、南北140mの一町強の寺域とみとめうるが、第10次調査（B-11a区本書取録）で検出した北東隅は直角ではなく、外方に開きぎみである。今回の調査は限られた線の調査で伽藍配置検出を目的としたものではない。今後の課題である。

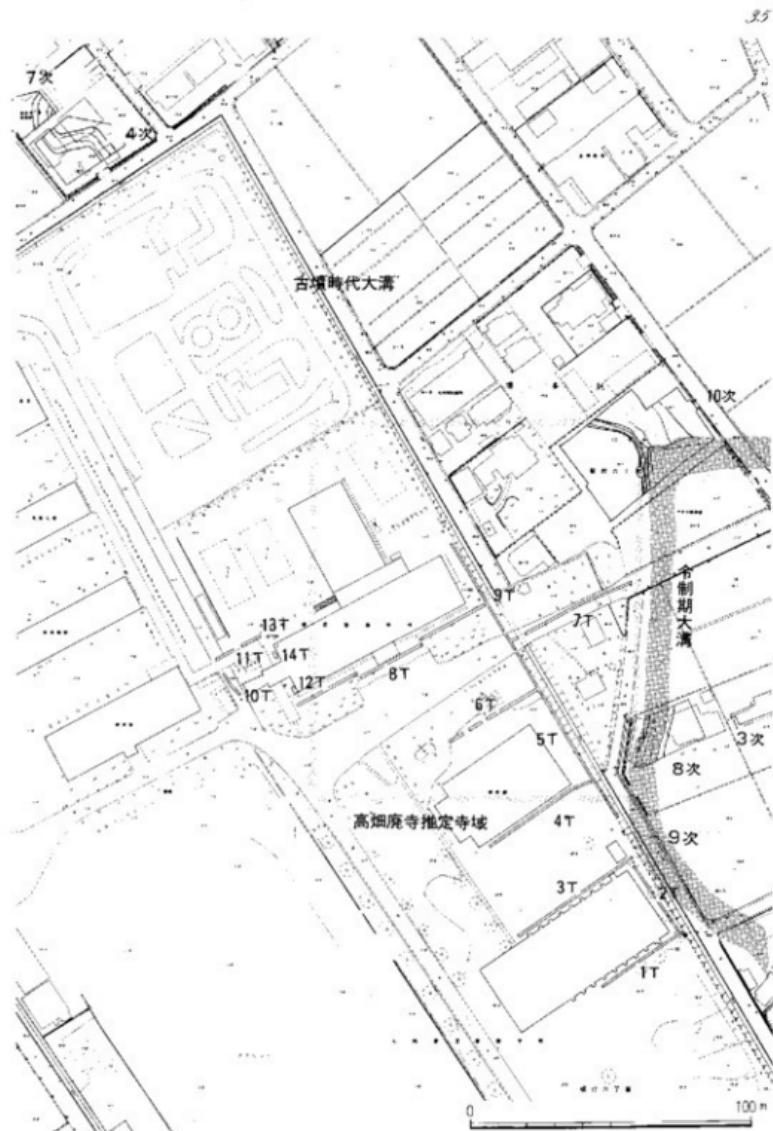


Fig. 72 トレンチ位置図

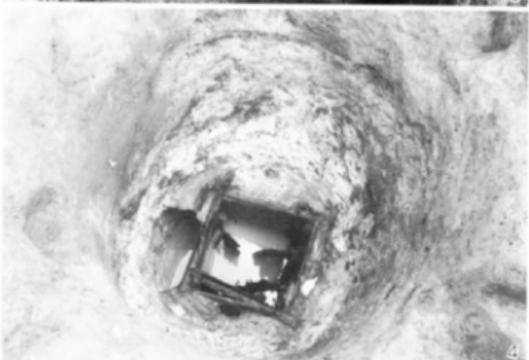
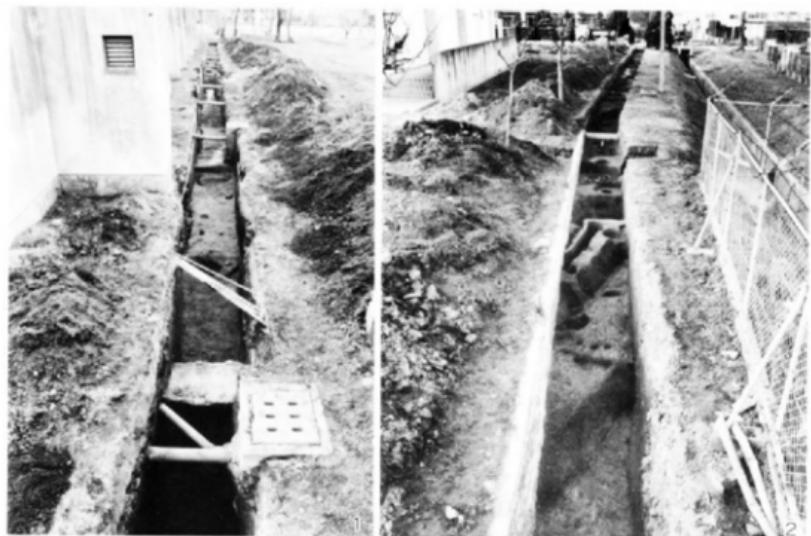


Fig. 73 トレンチ並びに遺構

1. 第3トレンチ(東から)
2. 第5トレンチ(北から)
3. SB019
4. SE021

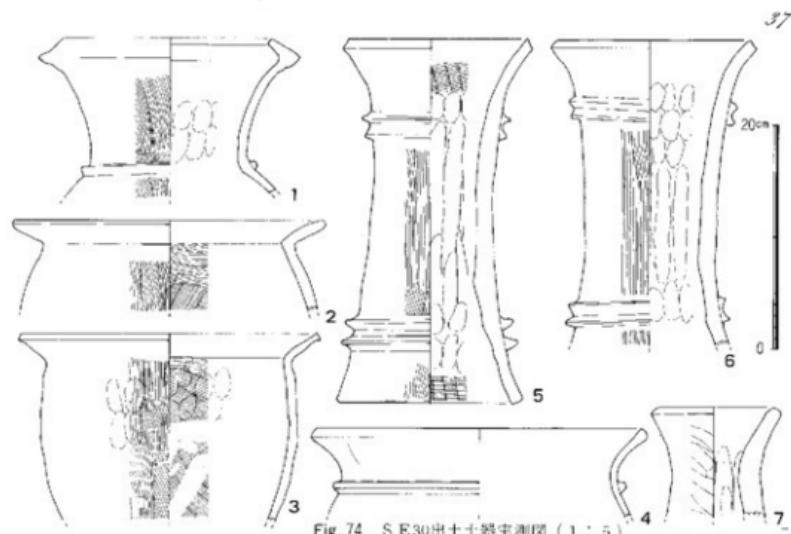


Fig. 74 SE 30出土土器実測図 (1:5)

SE 30と出土遺物

賢泰学校本館南の第7トレンチに検出された素掘りの井戸。北半は工事区外のため未掘である。上端は不整円形、径1.2m、深さ2.2mをかる。ほぼ垂直に掘りこまれ、鳥栖ロームを抜いて八女粘土にいたる。湧水点は鳥栖ローム、八女粘土の境にあり、その部分は円盤状に外方にくえている。埋上下層は粘質のつよい黒色土、上層は黒褐色土で人為的埋土である。下層から井戸祭紀に関連する異形の筒形器台が出土した。

器台A (5・6) 5は口径17cm、器高31.5cm、6も同形である。筒部上・下位に2条の内帯をめぐらす。外面ハケメ調査、上部凸帯の上方はヨコナデ、内面はユビオサエ、ユビケズリ、ヨコハケ調査である。2の外面は舟塗り。器台B (7) は通有の形態である。蓋(1)は口縁部がつよく内傾する二重口縁である。蓋は頸部に凹帯をめぐらすA(4)と、口縁部が単純に外反するB(2・3)がある。他に図示していないが相いタクキを外面に残すものがある。弥生後期中葉。

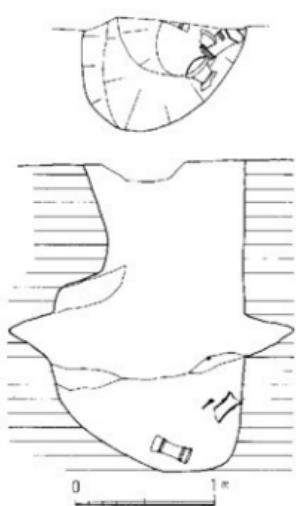


Fig. 75 SE 30実測図 (1:40)

VIII おわりに

本年度調査の成果をまとめてみよう。

板付遺跡東辺部の状況を知ることができた。

環溝の東辺で一旦済入する沖積地（D5-d区）は、東南部でも済入部を形づくる（E7-a区）。『田端遺跡』は2つの済入部の間の突出部に立地することになる。環溝の南方の貯蔵穴は、台地東縁部にまで分布している（F7-f区）。住居址もこの位置まで確認できた。（中期）。

弥生時代の水田を濱跡東縁部の済入部で確認した。板付遺跡以東の水田は、岡中10mの等高線が示すように、御笠川の形成した自然堤防と台地との間の後背湿地帯に立地している。自然堤防は、図示する水路の配列に明らかになるように条理期の水田区割が残り、それ以前の開川を知る。E5-b区・E5-d区・F5-d区以東にひろがる整地（客土）層は、この水田經營上の条件を改善するために行なわれたかさ上げを示すものなのかも知れない。その時期は、遺物からすると、奈良時代から平安時代の間である可能性がある。

高畠遺跡では、台地部での遺構分布を知ることができた。弥生時代初頭から、古墳時代奈良時代に至る遺構が確認できた。又、台地東縁部を流れる溝は、その北東端部で東方に向に屈曲すること、D10-a区、同b区で検出された溝が台地東辺部まで続き、同様に多量の遺物を出土することがわかった。

以上概要を記した。詳細は、0
正式報告に期したい。

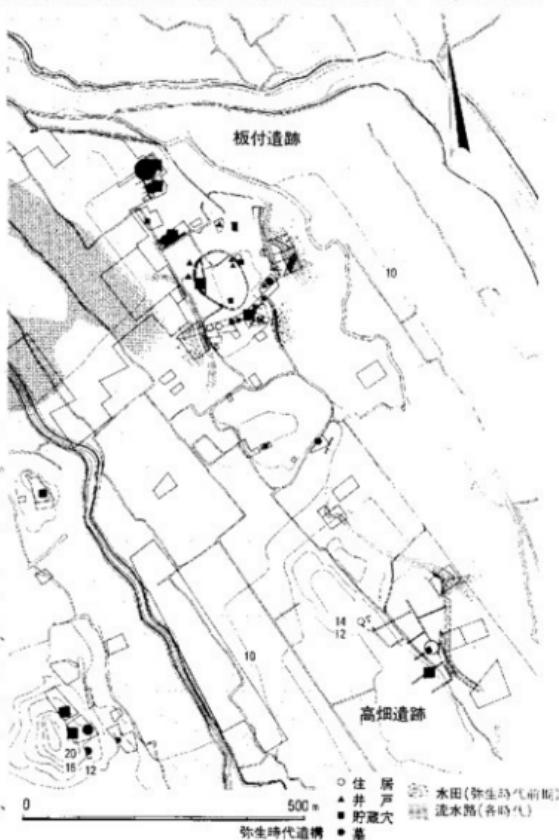
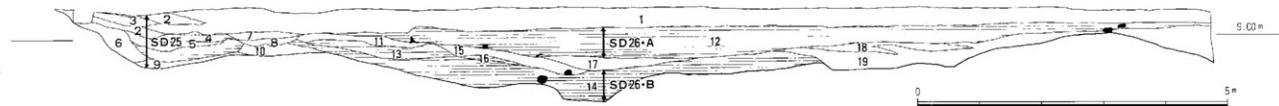


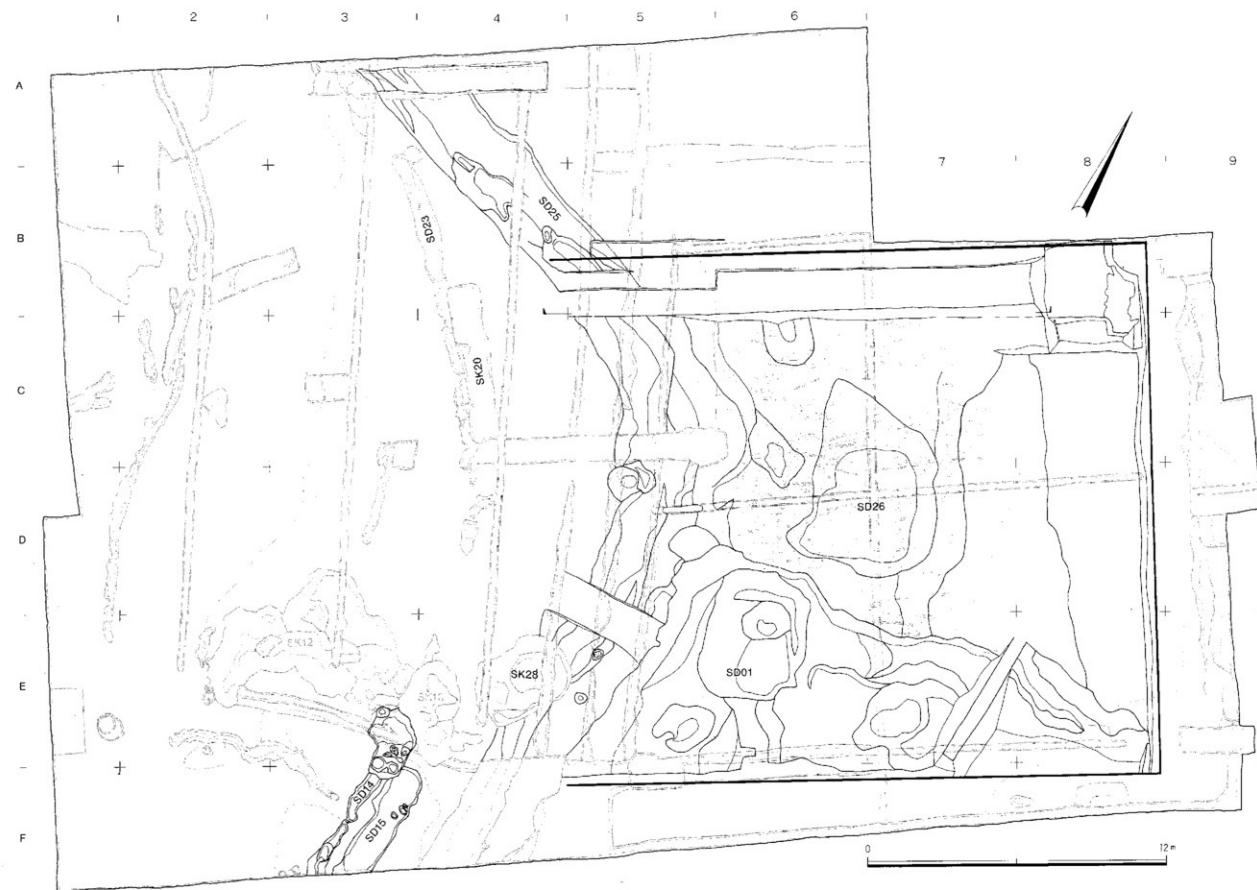
Fig. 76 板付周辺遺跡概観 (1 : 10000)



SD25・SD26 土層図
(-N)

IV 層
SD25 1. 粗砂混り灰褐色粘土
2. 粗砂 3. ロームブロック混り粗砂 4. 黒色粘土 5. 粗砂ブロック 6. ロームブロック
7. 灰褐色粘土(木片を多量に含む) 8. 砂混り灰褐色粘土

SD26 9. 白砂 10. 砂ブロック混り暗褐色粘土 11. 砂ブロック混り黒褐色粘土 12. 黑色粘土(西寄りでは木片を多量に含む)
13. 黑褐色粘土 14. 黒色粘土 15. 黒色シルト 16. 黒色粗砂 17. 砂混り黒色粘土 18. 砂ブロック 19. 灰色シルト



付図 板付BIIa区 (1:150)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第115集
板付周辺遺跡調査報告書(10)

— 1984年度調査概要 —

発行 福岡市教育委員会
(福岡市中央区天神1-7-23)

1985年3月31日 発行

印刷 同盟印刷株式会社

